

教養教育段階におけるテストに関する授業開発と実践（２）

西郡 大（佐賀大学アドミッションセンター）

木村 拓也（九州大学基幹教育院）

はじめに

本発表では、「教養教育段階におけるテストに関する授業開発と実践（１）」（木村・西郡）で報告した問題意識を踏まえ、佐賀大学で実施してきた教養科目の授業を対象に、受講学生のテストに対する意識の変化に注目した質問紙調査の結果を報告する。

授業の内容

佐賀大学における授業は、2010年度から2013年度にかけて実施してきた（2014年度以降は、教養教育の仕組みが変更されたため実施していない）。履修者は文系、理系の学部を問わず、77名（2010年度）、43名（2011年度）、86名（2012年度）、53名（2013年度）であった（2013年度は制度変更のため1年生の受講はなし）。授業名は、「教育の実際（テストを科学的に考える）」とし、「大学生になるためには入学試験があり、大学の講義には試験があり、資格を取るためには資格試験、就職を希望するなら採用試験と、私たちは、何らかの形で『テスト』と関わりを持っている。しかし、人生において何度も直面する『テスト』でありながら、『テスト』そのものについて、十分に考える機会は多くはない。本講義では、『テスト』そのものを科学的に考え、現実的な場面における評価、選抜、試験などの本質に迫っていく」という概要でシラバスを作成した。具体的な授業計画を図1に示す。授業内容は、先行して実施していた木村の授業資料を参考に構成するとともに、テストに対する科学的なアプローチとして、池田（1992）を手本に内容を作成した。また、テストの歴史や制度、身の周りのトピック等を題材として取り入れることで初学者にもわかりやすい内容を意識した。なお、15回のうち5回は、共通化を図るために筆者らで共有する内容で授業を行い、そのうち1回は、特別講師として佐賀大学で木村が授業（「M1をグランプ

リを科学する」）を担当した。最後の授業では、「テストの設計に挑戦」というテーマで、学生が測りたいと考える任意の特性を測るために、これまででない新たなテストを設計させることで、自分が作るテストのコンセプトや計画、信頼性と妥当性を確保するための工夫などについてレポートとしてまとめさせた（授業内容を踏まえて書くことを条件とした）。

- 第1回：本講義で取り扱う「テスト」の定義
- 第2回：テストが用いられる場面
- 第3回：戦前と戦後の入試（旧制高校の入試とは？）
- 第4回：アメリカの入試制度
- 第5回：偏差値とは何か？基本的な統計指標
- 第6回：ペーパーテストを吟味する
- 第7回：テスト理論（古典的テスト理論、項目反応理論）
- 第8回：大規模調査を考える-全国学力調査を題材に-
- 第9回：就職採用試験をテストの側面から考える
- 第10回：面接試験を考える
- 第11回：様々な誤差、分析で知っておくべき統計的性質
- 第12回：特別講義（M1 グランプリを科学する）
- 第13回：テスト・試験の公平性
- 第14回：社会心理学からみる公平性・個人の公正感とは？
- 第15回：テストの設計に挑戦
定期試験

図1. 授業内容（2013年度シラバスより抜粋）
下線部は著者間で共有している内容

質問紙調査の結果

筆者らは、2013年度に受講した学生を対象に質問紙調査を行った。調査目的は、授業を受ける前と全授業終了後で（前者を「事前調査」、後者を「事後調査」と呼ぶ）、テストの捉え方にどのような変化が生じるのかを明らかにすることである。同調査は、記名式で実施し、両方の質問紙に回答した34名を分析の対象とした。

事前調査の項目は、「教員免許の取得予定」「本講義に対する現時点での関心の程度」「テストの作り手の立場になったとき必要だと考える能力やスキル知識等」（自由記述）「テストにまつわるエピソード」（自由記述）、表1に示す項目に対する意識（どの程度意識して

いるか、または、これまで意識したことがあるか)で構成した。事後調査の項目は、事前調査との共通項目として、表1に示す項目に対する意識(どの程度意識しているか、または、これから意識しそうか)と「テストの作り手の立場になったとき必要だと考える能力やスキル知識等」(自由記述)を尋ねた。

表1の選択肢は、「まったく意識しない」「ほとんど意識しない」「どちらともいえない」「少し意識する」「意識している」という5件法で構成し、それぞれに1～5点を付与することで各項目の平均値の差を比較した。

その結果、すべての項目で受講後における平均点が高くなった。特に、「自分が受けるテスト得点が何を意味しているか」「自分が受けるテストがどのような目的で行われているか」「様々なテストがどのような仕組みで実施されているか」「それぞれのテストが何を測っているか」「良いテストとは何か」という項目で、統計的

な有意差が確認された。その理由として、同講義では、「テストスタンダード」(日本テスト学会編,2007)を踏まえ、テストを「能力、学力、性格、行動などの個人や集団の特性を測定するための用具であり・・・」と定義し、テストの目的や測定対象、テストの信頼性、妥当性、誤差といった基本的な考え方を、可能な限り学生に意識してもらうことを意図して授業を行ったことが要因の1つであると考えられる。

また、もう1つの共通項目である「テストの作り手の立場になったとき必要だと考える能力やスキル知識等」(自由記述)においては、事前調査では作題の内容に関する知識や技術についての記述が多かったものの、事後調査では、「信頼性」や「妥当性」、「測りたい能力を測る」といった記述もみられ、作題の内容に関わるものだけでなく、テストの精度という視点からテスト作成を捉える回答もみられるようになった。

表1. 受講前後における学生の意識の変化

質問項目	受講前	受講後	受講後-受講前
自分が受ける「テスト得点」が何を意味しているのか	3.41	3.97	0.56*
自分が受ける「テスト得点」の信頼性	3.56	3.94	0.38
自分が受ける「テスト得点」に含まれているかもしれない「誤差」	3.29	3.50	0.21
自分が受けるテストがどのような目的で行われているか	3.41	4.03	0.62**
自分が受けるテストの種類や形式の特徴	3.38	3.82	0.44
様々なテストがどのような仕組みで「作成」されているのか	2.76	3.26	0.50
様々なテストがどのような仕組みで「実施」されているのか	2.38	3.44	1.06***
日本と外国におけるテストの違い	2.47	2.76	0.29
それぞれのテストが何を測っているか	2.97	3.85	0.88***
良いテストとは何か	2.85	3.53	0.68*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

まとめ

事後調査では、授業のテーマに関する関心の高まりも尋ねており、「少し関心が高まった」が24名(70.6%)、「とても関心がたかまった」が10名(29.4%)となり、一定の評価を得ることができた(「関心は高まらなかった」は0名)。また、「テストについての発見」を尋ねた自由記述回答では、「この講義を受けるまでは、テストの妥当性などについて考えたことはなく(特に、ペーパーテスト)、世の中で行われているテストというのはすべて正確に作られていて、正しいものなのだと

思っていた。しかし、講義を受けて、必ずしもそうではないのだということがわかり、これからは自分が受けるテストの信頼性や妥当性についても考えてみようと思った。」といった回答がみられ、テスト研究分野の普及に教養教育科目が活かせる可能性が示唆された。

【文献】

池田央(1992).『テストの科学—試験にかかわるすべての人に』日本文化科学社
日本テスト学会編(2007).『テストスタンダード』